

## XIII

## 「神に依り頼む」に収録された文章



[ PDF版増補 4 ]

13 章は、「神に依り頼む」— 基督教独立学園五十年記念文集 — に収録されている鈴木  
木の文書です。12 章までに掲載した文書は省き、収録順ではなく年代順に並べまし  
た。なお、「神に依り頼む」 p.875 に収録されている「みゆるしあらずば」は、鈴木  
による政池仁への弔辞を別人が編集したものであるため、ここには収録していません。

## 「神に依り頼む」収録文書集 目次

- 13-1 政池進告別の辞 661  
『神に依り頼む』 p.890 ~ p.892
- 13-2 基督教独立学園高等学校創立式 創立の辞 664  
『神に依り頼む』 p.46 ~ p.47
- 13-3 西川たえ子告別式式辞 666  
『神に依り頼む』 p.933 ~ p.937
- 13-4 真理を愛すること — 信仰と科学 670  
『神に依り頼む』 p.395 ~ p.407
- 13-5 M君、Tさん結婚式式辞 681  
『神に依り頼む』 p.653 ~ p.655
- 13-6 むらやまみち お ついとう じ  
村山道雄追悼の辞 684  
『神に依り頼む』 p.885 ~ p.886
- 13-7 佐藤のぶ告別式式辞 686  
『神に依り頼む』 p.915 ~ p.920
- 13-8 まさいけじん  
政池仁と私 691  
『神に依り頼む』 p.252 ~ p.253

## 13-1 政池進告別の辞

政池進は、政池仁の次男として、1937年（昭和12年）6月10日に東京市杉並区天沼3丁目604番地において生まれ、1939年（昭和14年）10月30日に召されました。これより前10月28日より下痢の気味にして減食して手当を受けていましたが、病臥<sup>(1)</sup>する程ではなく平常のごとく元気にして居りました。30日朝9時頃ひきつけを起こし、ただちに医師を迎えました。さほどの重態とも思われぬような様子でありましたが、自家中毒症<sup>(2)</sup>でありまして、夕方より一層容態悪化してついに9時に天に召されました。

この地上における生涯はわずかに二年四ヶ月でありましたが、人見知りをしない子でありまして、誰にでも機嫌よくしておりましたので、多くの人に愛せられ、多くの人を喜ばせておりました。最近言葉もよく話せるようになり、これから一層可愛らしくなる時でありましたのに、誠に惜しき極みであります。

肉の父なる政池仁が真理を愛し、日本の国を愛し、キリストを愛するの余り静岡高等学校教授を辞し、独立伝道を為すようになりまして、政池の家は多くの苦難と戦わなければなりません。まず第一の苦難は物質的の苦難であります。人に頭を少しく下げるならば、伝道して居りましてさほど物質的に苦しまずとも済むと思えます。完全なる独立を保ちつつ、神にのみ頼って伝道するために、物質的困難が沢山押し寄せて参りました。多分少しく節を枉げ<sup>(3)</sup>、この世と妥協する方がより善く、より楽に伝道も出来、この世をよくすることも出来るのではないかとの悪魔の誘惑を幾度か受けたことと思えます。

物質的苦難に優ってたえ難きは、精神的苦難であります。伝道者には物質的苦難はあっても、精神的には平静であり得るだろうとは、真の信仰を知らない者の考えでありまして、多くの精神的苦難が伝道者にも臨みます。ある時は神の愛を疑わざるを得なくなり、全世界が真暗になることがあります。自己の心の衷の罪と戦わなければなりません、世の罪と戦わなければなりません。誠の神を信ずる者には、大きな大きな精神的苦難が臨みます。政池もこれ等に打ち勝つ為に、血みどろの戦いを戦ったことと思えます。ことに最近我等の愛する日本の滅亡に瀕しつつあるこの現状の故に、この国を愛する余り、多くの生々しい戦が戦われ苦き杯を沢山飲まされました。

神は私共を鍛錬し、その御用に立たしむるようになす為に、否、御自身の限りなき愛を注ぎ下さる為にさえも、多くの苦難を私共に与え給います。「それは主その愛する者を懲しめ、すべてその受け給う子を鞭うち給えばなり。」<sup>(4)</sup>また「誰か父の懲しめぬ子あらんや」<sup>(5)</sup>とあるごとくであります。私共の信仰はこの世の幸福を求むる御利益

宗教ではありません。いかに苦しくとも、真理なるが故に信ぜざるを得ません、神の愛を信ぜざるを得ません。たとい焼かるる為に身を付されるとも信じます。しかし恩恵に満ち給う神は、私共に苦難をのみは与え給いません。弱き私共の上を思いやり下さって、私共がこれに堪え得る力を与え下さり、堪え得るように慰めを与え下さいます。苦難の中に折々与えられる喜びや慰めの意義はここにあります。この意味におきまして、政池仁にも沢山の喜び、慰めが与えられました。その中の最大なるものは、三人の子供であります。世には物質的幸福は有り余る程与えられて、子供なき為に淋しき、つまらなき日を送っている者が沢山あります時に、女の子一人、男の子二人の子供は実に百万の富にも優れた宝であります。この為、どの位政池が力づけられ、慰められたかわかりません。政池の独立伝道の戦にどれだけこの三人の子供が功を立てた<sup>(6)</sup>かは測り知れません。

ことにもっとも幼き進を最も愛して居りました。この子がなかったなら、とっくに負けて斃れてしまつて居たらうとは多分政池の偽らざる心であります。多くの人に愛せられ、多くの人を喜ばせました政池進は、またその父親なる政池仁を最も喜ばせ、励まし、慰めました。

政池の仕事は、今の日本よりは無視せられて居ります。しかし彼が屈服せず今の戦を戦い通すならば、何も特に有名にならずとも、それだけで日本の為、世界の為に、神の為に大なる仕事であります。日本も世界も後になってそれを覚るであります。かく言うに誇大妄想のごとくに聞えるかも知れません。しかし決してそうではありません。私共はつまらない者であります。手腕もありません、知能もありません。この事は誰よりも私共自身がよく知つて居ります。しかし全能の神を信じ誠の信仰を与えられました私共は、これだけの確信は持つて居ります。自己のつまらない者であるを知れば知る程、この自信を強められます。「これすぐれて大なる力の我らより出でずして、神より出づることの現われん為なり」<sup>(7)</sup>であります。私共はつまらない者であります。神は全知全能であらせられます。私共は取るに足らん者であります。私共の信ずるイエス・キリストの福音は偉いものであります。それ故に日本に、東洋にこの誠の福音が根を下ろす為の政池の仕事は、神の御眼からご覧になる時は大なる仕事であります。特に、今欧州において真の信仰が忘れられんとしている時に、これは全世界の信仰復活の礎石であります。しかしてこの功績の大部分は、わずか二年余の生涯ではあります。政池進に帰せらるべきであります。政池進のこの世における生涯は短いものであります。しかし神は政池進の生涯を十二分に使い給うて、政池進を通して、政池仁の事業に力を与え給いました。そして今や、なおこの世に留めてその父を援けるより、御許に召し、天よりその父を援けしむるを嘉しと思し召し給うて、あるいはまた政池進自身を天において必要とし給う故に、突然我等の間より天に召し給うたのであります。政池進は今より天に在って一層強

くその父を励まし、慰<sup>なぐさ</sup>め、力づけるでありますよう。

愛する者との別離は悲しくあります。しかし私共はそれに打ち勝たなければなりません。彼はその地上における天職<sup>は</sup>を果たして、より善<sup>よ</sup>き世界に移ったのであります。また私共には再会の希望があります。勇<sup>ゆう</sup>を鼓<sup>こ</sup>して<sup>(8)</sup>、政池<sup>まさいけ</sup>進<sup>すすむ</sup>を天の真<sup>まこと</sup>の父なる神の御<sup>み</sup>許<sup>もと</sup>に送りましょう。

(『聖書の日本』第 63 号、1939 年 12 月 1 日)

13-2 基督教独立学園高等学校創立式<sup>(9)</sup>

1948 年 5 月 26 日

## 創立の辞

校長 鈴木 弼美

本日此處に東京より理事の方々を迎へ、又村の学校の先生がたや県内の信仰の友人や生徒の父兄と共に基督教独立学園高等学校の創立式を行うことの出来ますのは大きな喜びであります。種々の困難にも拘らず信仰の友人達の祈に支えられ御恵み深き主の御護りの下に創立に到り得ましたことは感謝にたえないことであります。

内村鑑三先生が人は凡て神の御前に平等であること、誰でも神にのみ依りすがって立派な信仰生涯を送ることが出来ることを教えて下さいました。私はそれを実証したく此の山の中の村に入って参りました。日本で最も普通な、平凡な此の山の中の農民が牧師や監督のような人間的指導者がなくとも立派に信仰を保って行けることを示し得るならば内村先生の教えの実証であります。

唯物的共産主義がその根本の理論の欠陥にも拘らず多くの人をひきつけて居りますのは人間の平等という思想の故であります。併し此平等は物質の平等であります、生活資材の平等であります。たかが知れたものであります。しかもその平等さえ充分には行われて居りません。物質の平等よりもっと大切なのは靈魂の平等であります。此の大切な靈魂の平等を内村先生が明にしたのであります。内村先生の偉業は年がたつに従って世界から認められるであります。あとに残りました私共は此真理を実証し内村先生の偉業を完成しなければなりません。

基督教独立学園の目的を基督教の精神に基き天賦の個性を發展し立派な独立人を養成する事に致しましたのはこの為であります。眞の独立は神にのみ依り頼む事あります。独立は孤独ではありません。愛による助け合いは美しいことあります。そして誠の独立人にして始めて誠の愛の交りが出来るのであります。人の独立には経済的独立が必要であります。併し最も大切なのは信仰的独立であります。そして愚かな人でも弱き人でも神に依り頼む時は立派に独立の信仰を保って行けるのであります。誠に「神の愚は人よりも智く、神の弱きは人よりも強ければなり」<sup>(10)</sup>であります。

内村先生は又儀式によらず「神は靈なれば拝する者も靈と眞とをもて拝すべき」<sup>(11)</sup>事を徹底せられました。制度的教会が信仰の母体でありますと靈と眞とをもて拝するに徹底しにくいのでありまして、特に教会に信仰がなくなり制度のみ残りますとこの弊害が強くなります。基督教は眞理であります。眞理探究が目的である学校が、信

仰の母体であり、伝道の機関でありますならば、この心配がありません。信仰のとるべき一つの新しき形態であります。実験してみる十分な価値のあることであります。

これらの理想を達成せんところに新しき高等学校を創立<sup>いた</sup>致しました。日本復興<sup>ふっこう</sup>に信仰の必要が特に叫ばれて居<sup>お</sup>ります。形式にとらわれない、生きた、独立の信仰を興<sup>おこ</sup>すことにより新しき日本の建設に少しでも役立てば誠<sup>まこと</sup>に幸いであります。

(『聖書の日本』第 145 号)

## 13-3 西川たえ子告別式式辞

西川たえ子先生は小学校教師を自分の天職と信じました。給料を得るために教師となるのではなく、教師の仕事そのものを生き甲斐あるものと考えました。受験準備を主とする普通高校で学び、儲けることを主とする教育を受けたのではこのような信念は起こりません。勉強も試験のためでなく、人格を築きあげるためであることを学び、如何に人生を生くべきかを深く考えたからであります。

形式を重んじる日本では、国立大学などの有名校出身の資格がないと就職が困難であります。そしてそれ故多くの人が、そこでどんな教育がなされているかということにはかまわないで有名校へと集まりまして、今日の日本のどうすることもできない教育の乱れが生まれました。有名校への集中は受験勉強を激しくします。儲け主義、出世主義につながる受験勉強を無理にさせられておれば本当の教師になろうという意欲はなくなってしまいます。本当の勉強をして、本当の教師になろうとする人は大学には入れない、教師になれないという矛盾が日本の現在においては行われております。西川先生は、自分は小学校の教師になるのが使命であると確信いたしましたから、その壁を自分でつき破って道を開かれたのであります。千葉の名もない私立短大に進みまして、国立大学を出た者よりもはるかによい勉強をなさいました。そして後世への最大遺物で学びました如く、他人のいやがるどころへゆけ、他人のいやがることをなせ、ということを実行いたしました。進んで辺地である叶水小学校を志望しました。叶水小学校を自発的に志望するということは前代未聞のことでありました。形式を重んじる教育界では行く人がなくて困っておるところでありますので採用しなければならなくなりました。叶水小学校でも叶水地域でも大変喜んでくれました。教師となりまして国立大学を出た人以上に立派にその仕事をやり通しました。ほとんどすべての人が儲けるために教師になっているときに、こうして本当の教師になる道を拓かれた、これは実に尊いことでもあります。

児童を愛する愛はもっとも美しいものであります。あとで読んで戴きますが、遺稿（第八部所載<sup>(13)</sup>）を見ますとそのことがよくわかります。出来ない児が出来るといった心から喜ぶその喜びかた、思うように教育の効果があがらないといった涙を流す真情、共にもっとも尊いものであります。御父上の西川勇平さんは、家の娘はそんな弱虫では教師の役は務まらないではないか、教師には適さないのではないかとお考えになったそうです。けれども、子供のために泣くことのできることで、そのことこそ教師としてもっとも尊い資格であります。

西川先生は、今日の日本の混乱した教育を救う一つの大きな道のあること、本当の

教育の行われる道のあることを示してくださいました。これは本当に大きなことであります。御自分で、この道を開拓されたのであります。泣き虫のような西川先生にそういう強いところがありました。そうしてそのおかげでもって、独立学園の卒業生が先生になる道が開けて本年もまた西川先生の後に続く人が叶水のような辺地に参ることになっております。

西川先生はそういう重い任務をもって、そして、たとえ世間的に見れば小さい仕事かもしれませんが本当に大きな仕事をなしつつあったのであります。その西川先生が私共の意表に出るような道をもって早く御生涯を終えられるという出来事が起こりました。人間的な浅はかな考えによりますと、こういう方こそ長く生きて、そしてこういう日本の教育を改善する為に役立って欲しいと思うのでありますけれども、神様の御考えは私共の考えとは東と西と違うように違っておりまして、私共に分らないのであります。本当に惜しんでも余りあることをございます。私共本当に悲しく思い、惜しく思い嘆くのでありますけれども、それにも増して肉親の方々の嘆きは大きいと思います。

なぜ神様はこんなことをなさるのか。道路工事の不備の為に誰かが犠牲になるとしても他の人の方がよいのではないか。もっとも大きなことをなされようとしている尊い命を何故にこんなに早く神様はおつみになるのか。本当に私共には分からないことでもあります。神様に向って抗議を申したくなります。しかしそれは人間の小さな考えから来ることでありまして、神様の側におきましては、今このときに西川先生の肉の命を奪われて天にお召しになるそのことが、神様の御栄光の為に西川先生の御生涯の為にきつと、もっともいいことであるにちがいません。私共にはそのことは分かりません。けれども神様のなさることからきつとそうであるに違いありません。しいて愚かな私共の頭を鞭打って神様の御旨がどこにあるかということを考えてみますときに、多分西川先生が若くして命を失われるというその犠牲が日本に本当の教育が行われるために非常に大きな力となって、大きな働きをするのではないかと想像されるのであります。

人間の生涯というのはただ長いだけが尊いではありません。短い生涯でも他のどんな長い生涯と比べても劣らないところの尊い生涯が沢山あります。内村先生の『愛吟』という翻訳した詩集の中に、ベン・ジョンソンの「短命」という詩があります<sup>(14)</sup>。

木の嵩を増すが如く、伸びて必ず良き人<sup>(15)</sup>ならず、  
樫は三百年を経て、枯れて仆れて丸太たるのみ、

其の日限りの百合の花は、五月の園にはるか麗はし、

たとえ其<sup>その</sup>夜<sup>たお</sup>仆<sup>ひかり</sup>れて死ぬ<sup>めい</sup>も、光輝<sup>まった</sup>の草と花にてありき<sup>(16)</sup>、

美<sup>せいさい</sup>は精細<sup>うつわ</sup>の器<sup>あらわ</sup>に現<sup>めい</sup>はれ、生<sup>また</sup>は短期<sup>めい</sup>の命<sup>また</sup>に全<sup>また</sup>し。

まことに美<sup>せいさい</sup>は精細<sup>あらわ</sup>の器<sup>また</sup>に現<sup>また</sup>はれ、生<sup>また</sup>は短期<sup>また</sup>の命<sup>また</sup>に全<sup>また</sup>しであります。

西川先生が長く生きられて、その美<sup>うら</sup>わしい教育<sup>うら</sup>の仕事<sup>うら</sup>を長く続けることはよいこと  
でありましょうけれども、今こうして若く生を終えられること、本当に惜しい様<sup>お</sup>であ  
りますけれども、この短い生涯<sup>ほか</sup>のなかに外<sup>ほか</sup>のどんな長い生涯<sup>まさ</sup>にも優<sup>うら</sup>って本当<sup>うら</sup>の美<sup>うら</sup>わし  
き本当<sup>とうと</sup>の尊<sup>とうと</sup>さがあるのです。それですから私共はただ短いからといって、た  
だ惜<sup>お</sup>しんでばかりはいられないのであります。何か私共<sup>わか</sup>に充分<sup>わか</sup>に解<sup>わか</sup>らなくてもここに  
神様<sup>み</sup>の深い御心<sup>み</sup>があります。必ずこれによって何か偉いことが起こるものになると  
そう信じます。悪魔<sup>おとめ</sup>は悪魔<sup>おとめ</sup>の敵<sup>がいか</sup>であります。美<sup>あ</sup>わしい信仰<sup>あ</sup>を持った、賢<sup>かしこ</sup>い美<sup>うら</sup>わしい  
乙女<sup>おとめ</sup>を奪<sup>がいか</sup>いまして、勝利<sup>あ</sup>の凱歌<sup>あ</sup>を揚<sup>あ</sup>げておるかも知れません。けれどもしかし実はそ  
れは敗北<sup>あ</sup>でありまして、神様<sup>み</sup>は悪魔<sup>み</sup>に打ち勝<sup>み</sup>たれてその高い深い御旨<sup>み</sup>を行われつつあ  
るのであります。私共は今充分<sup>わか</sup>解<sup>わか</sup>らなくても必ず神様<sup>わか</sup>がこれをもってその大なる栄  
光<sup>たま</sup>を現<sup>たま</sup>わし給<sup>たま</sup>うことを信じなければなりません。

しかしいくら麗<sup>うらわ</sup>しい尊<sup>とうと</sup>い生涯<sup>とうと</sup>であると申しましても、私共にとりまして別離<sup>にくしん</sup>は悲  
しいものであります。本当に愛する友<sup>にくしん</sup>を失<sup>にくしん</sup>いました私共、愛する肉親<sup>にくしん</sup>の者<sup>にくしん</sup>を失<sup>にくしん</sup>  
いた肉親<sup>にくしん</sup>の方々、その悲しみは簡単<sup>にくしん</sup>には消<sup>にくしん</sup>すことの出来ないものであります。本当に私  
共はまことの慰<sup>なぐさ</sup>めを必要<sup>なぐさ</sup>といたします。すべての慰<sup>なぐさ</sup>めの神<sup>しゅ</sup>なる主イエス・キリスト  
の父<sup>なぐさ</sup>なる神様<sup>なぐさ</sup>の慰<sup>なぐさ</sup>めを必要<sup>なぐさ</sup>といたします。

私共にとりまして最大の慰<sup>なぐさ</sup>めは私共にはまた逢<sup>あ</sup>う喜<sup>あ</sup>びが待<sup>あ</sup>っているということ  
であります。死<sup>うら</sup>んでいった者が非常<sup>うら</sup>に美<sup>うら</sup>わしいものであるといっても、かえってそのた  
めに私共<sup>なげ</sup>の嘆<sup>なげ</sup>きは増<sup>なげ</sup>します。賢<sup>かしこ</sup>い人<sup>かしこ</sup>だといってもその賢<sup>かしこ</sup>い人と別<sup>かしこ</sup>れる悲<sup>かしこ</sup>しみが増<sup>かしこ</sup>  
ばかりであります。がしかし私共はまた逢<sup>あ</sup>うことが出来るのだ。今のこの別<sup>あ</sup>れは永遠<sup>あ</sup>  
の別<sup>あ</sup>れではなくて、やがて私共も死<sup>あ</sup>にまするけれども、時<sup>あ</sup>が来ると私共は皆復活<sup>あ</sup>の朝<sup>あ</sup>  
に復活<sup>あ</sup>いたしまして永遠<sup>あ</sup>の生命<sup>あ</sup>を与<sup>あ</sup>えられて共に手<sup>あ</sup>を取<sup>あ</sup>って喜<sup>あ</sup>ぶことが出来るので  
あります。

この信仰<sup>なぐさ</sup>それだけが私共唯一<sup>なぐさ</sup>の慰<sup>なぐさ</sup>めであります。昨日<sup>なぐさ</sup>は全世界<sup>なぐさ</sup>でキリストの復活<sup>なぐさ</sup>  
を祝<sup>なぐさ</sup>う日<sup>なぐさ</sup>でありました。世界<sup>なぐさ</sup>のもっともよい部分<sup>なぐさ</sup>がキリストが死人<sup>なぐさ</sup>のうちから復活<sup>なぐさ</sup>  
給<sup>なぐさ</sup>うたそのことを堅<sup>なぐさ</sup>く信<sup>なぐさ</sup>じて、そうしてすべての喜<sup>なぐさ</sup>び、すべての希望<sup>なぐさ</sup>をこのキリスト  
の復活<sup>なぐさ</sup>という一つの歴<sup>なぐさ</sup>史的<sup>なぐさ</sup>事実<sup>なぐさ</sup>に置<sup>なぐさ</sup>いているのであります。キリストの復活<sup>なぐさ</sup>し給<sup>なぐさ</sup>うた  
が如<sup>なぐさ</sup>くに私共も皆復活<sup>なぐさ</sup>するのであるというその信仰<sup>なぐさ</sup>にすべての希望<sup>なぐさ</sup>と喜<sup>なぐさ</sup>びを置<sup>なぐさ</sup>くので  
あります。これは私共<sup>なぐさ</sup>に本当<sup>なぐさ</sup>の喜<sup>なぐさ</sup>びを与<sup>なぐさ</sup>えます。私共は愛<sup>なぐさ</sup>する者とまた逢<sup>なぐさ</sup>うことが出  
来るのだという希望<sup>なぐさ</sup>があります。これだけが愛<sup>なぐさ</sup>する者<sup>なぐさ</sup>を失<sup>なぐさ</sup>った人間<sup>なぐさ</sup>にとっての唯一<sup>なぐさ</sup>の

喜びであり慰<sup>なぐさ</sup>めであります。それですから復活の真理は愛する者を天国に送って初めて解<sup>わか</sup>る真理であるとよく言われております。

私共は一時<sup>いつとき</sup>の別れでも悲しいのでありますからまして死別ということはもっともかなしいものであります。涙はひとりでに頬<sup>ほお</sup>に流れ落ちます。けれどもその涙のうちにまた逢<sup>あ</sup>う喜び、また逢<sup>あ</sup>う希望があります。涙のうちにもある朗<sup>ほが</sup>らかさをもって私共は西川先生を送ることが出来ます。本当の意味で美しく尊<sup>とうと</sup>いけれども短い西川先生の御生涯<sup>ご</sup>を思い、西川先生をただ惜<sup>お</sup>しむだけでなく、悲しむだけでなくして、また逢<sup>あ</sup>う喜びをもって神様<sup>みもと</sup>の御許に送りたいと思います。

『白樺のふるさと』岩手三愛農村塾<sup>(17)</sup>出版会 1970年

## 13-4 真理を愛すること

— 信仰と科学 —

## (一) 本当の学問

私はキリスト教、それも原始的な福音信仰ふくいんを持っておりませんが、物理学をやったことが信仰を持つのに助けになって居おります。物理学をやったことと信仰を持っているという事との関係について申し上げて、皆様の参考にしたいと思うのです。

まず物理学をもって代表される自然科学というものがどういうものであるかといいますと、良く物を見て、よく考えて、真理を求める。実際の事をよく観察する。その為には測定という事をするが、いいかげんな事はしない。出来るだけ正確に計る。私が昔の高校の時に物理の実験けんびきょうで顕微鏡けんびきょうを使って、コンパレーター<sup>(18)</sup>というもので長さを計った。ある学生が2センチ位と言いましたら、先生がおこられた。これが2センチ位だというのは見るだけで分かる。それをコンパレーターを使って測定するのは、出来るだけ正確に小数以下何桁けたまでというふうに測るので、いい加減はかな測り方をして2センチ位などと言っては駄目だめだと叱しかられました。このように正確に物を見て、正確に良く考えて、本当の真理を求めることが自然科学です。そして、人間は、どんな偉い学者でも、いくら正確にみて考えたとしても間違いはします。ですから正確に間違いなく考えたつもりでも間違っているかもしれないというので、自然科学の場合は実験をしたりして間違いがないということを実証していきます。その上また学会で発表して多くの人の意見を聞きます。そういう事をしますから自然科学が非常に発達したのです。人間の知恵ちえというものは非常に愚かなもので間違いをし易やすいけれども、それにもかかわらずそういう事をやりましたから、大きな事が出来る。月の世界へ行って来ることが出来るという事にもなったのです。

それを言いかえれば、本当の事を愛して、求めていくという事です。今は主として哲学を意味するようになりましたが、学問の事をフィロソフィアと申しますが、これは知恵を愛するという事なのです。これはソクラテスが言いだしたことで、それまでは学問とは本当らしくない物を本当らしく見せるようにする事だと考えられていました。そういう学者をソフィスト (Sophist) といいました。意味は知恵主義者ですが、日本の哲学史の方ではこれを詭弁きべん学派と訳しています。詭弁きべんというのは間違った議論です。人間は万物ばんぶつの尺度しゃくどだ、真理というものは人間がつくるものだと考え、嘘らしく見えるものを本当らしく言うことが学問だと考えておりました。それではいけない。真理というものがあるのであって、謙虚けんきょに真理の前にひざまずいて、真理を求めていくというのが学問だという事を示したのがソクラテスです。それから本当の意

味での学問が始まったと言ってよいと思います。

ソクラテスの弟子のプラトンがなおその考えを発展させ、またその弟子のアリストテレスがさらにその考えを発展させましたから、ソクラテス、プラトン、アリストテレスによって人間の世界に学問が確立されたと言っていいわけです。

アリストテレスは本当に学問をする精神を持って自然の研究もし、精神的な事も研究して、それから二千年近くの間、学問といえばアリストテレス以上に出ないと言われた。それが三百余年<sup>よ</sup>前ガリレオという人が出て、アリストテレスの学問にも間違っているところがあるということに気がついて、また新しく学問が進歩して今日の科学時代と言われる自然科学がさかんになった時代が出来たのです。そういうように今日の学問のもと<sup>けんきょ</sup>はソクラテスです。謙虚に真理が示されるように、真理というものはあるのであるから、その前にひざまずいていく。真理というのは人間がつくるものではなく、信仰があればはっきり分かりますが、神様が与えたもので、それを求めて行くのが学問です。

心から本当の物を求めていこうとすると人間の知恵では求められないものがあるという事が分かってまいりまして、信仰を求めようになる。人間の命というものはどうい<sup>れいこん</sup>うものかとか、<sup>れいこん</sup>霊魂とはどういうものかというようなことを、良く見て考えると、どうしても信仰<sup>いた</sup>に至らざるを得なくなってくるのであります。ですから本当の信仰を持つということと、自然科学をすることとは全く同じ精神です。ただその研究する対象が片方は自然であり、片方は<sup>れいこん</sup>霊魂とか精神というものであるという違いはありますが、その態度というものは全く同じなのです。そしてよく世の中の事を、人間世界の<sup>こと</sup>を見て、考えていくと、どうしてもキリスト教の信仰に到達するようになって参ります。

ですから本当に真理を愛し、真実を愛していれば自然科学も発達してくるし、また、自然科学を学ぶことによって人間が文化をつくっていくことが出来るようになります。同時にまた信仰のこともよく学んで信仰を持つようになるわけです。

それ故に人間の知恵というものは不完全であるから、俺は何でも良く分かるなどと<sup>ごうまん</sup>傲慢な気持になっては本当の学問は出来ないわけです。本当の学問をするには謙虚になり、人の意見を聞いて間違いを直していくようにしなくては本当のものは求められません。それで自然科学の場合でも自分の考えを発表して、検討してもらって間違いを正していくということをしてきています。学問の世界には学会というのがあります。物理学なら物理学会、数学なら数学会、医学なら医学会というものがあ<sup>り</sup>まして、自分の研究したものを学会で発表して、いろいろの人から意見を聞いて検討するという<sup>こと</sup>をいたします。そういう事が学問の研究には欠くべからざる事ではありますが、そういう精神を作ったのがソクラテスです。従ってソクラテスが学問のもとだといえます。

ソクラテスの言いました事で一番有名なことは自分は愚かな者で、間違いをし易い者であるという事が分かったということです。だから一生懸命真理を求めていかなければならないと人にも教えておったのであります。

そのころソクラテスについてこういう評判がたちました。

ソフォクレスは賢い。エウリピデスはなお賢い。しかし万人のうちで一番賢いのはソクラテスであるという評判が起こった。実際の事をいうと、ギリシャにはデルフォイという所にアポロの神殿がありまして、その神託（神のおつげ）にそういう言葉があったのです。

ソフォクレスはギリシャ悲劇の大家で、ソフォクレス、エウリピデス、アイスキュロスというのがギリシャ悲劇の三大作家であると言われていますが、そのうちの二人をとってこう言ったわけです。そして当時デルフォイの神託を聞きまして、ソクラテスは自分が一番馬鹿だと、また、自分程愚かな者はないと思っているのに、そのソクラテスが一番賢いなんていうのは、いくらデルフォイの神託でもおかしい。いくらアポロの神様のいうことでも間違っているというわけです。

そこでソクラテスは考えまして、それではその時代の一番賢いという人達のところへ行って話をしてみよう。ここに私よりも賢い人がおるとことを示してデルフォイの神託が間違っていることを実証しようと考えました。当時の有名な学者の所、賢人と当時の人が行った人の所へ行って問答をしました。ところがその賢人もソクラテスと同じように本当のことが充分つかめていない。その点においてはソクラテスと同じであるけれども、ソクラテスは自分が愚かな者であるということを知っていた。ところが賢人達は自分は賢く真理をつかみ得ると考えていた。そこで真理をつかみ得ないという点において、愚かさという点においてはソクラテスも賢人達も同じであったが、自分が愚かな者であるということを知っていた点においてソクラテスの方が賢かったという事が分かって、やはりデルフォイの神託は正しかったという事を悟ったという話があります。これは弟子のプラトンの書きました『ソクラテスの弁明』という本に書かれています。そのように本当の学問というのは自分が愚かであるということを知らなければ出来ない。ソクラテスはそういう事を悟ったので、学問のもとをつくることができたのです。

## (2) 詭弁と真実

詭弁ということですが、いろいろの詭弁の中で一番有名なのはゼノンという人の詭弁です。

ギリシャ神話の中に出てくる英雄アキレスと亀が競争する。速いアキレスと競争するのに亀がアキレスより一歩でも先に出ていると、もうアキレスは永久に亀に追いつくことが出来ない。日本でいう時には兎と亀と言ったら一番分かり易いでしょう、

亀が、<sup>うさぎ</sup> 兎より一歩でも前にいたら、<sup>うさぎ</sup> 兎は永久に亀に追いつくことが出来ない。速い人はのろい人をどんどん追い越しますからそんな馬鹿なことはないわけですが、ゼノンという人は次のような詭弁<sup>きべん</sup>を使うわけです。

<sup>うさぎ</sup> 兎が亀の所に行きます。亀はいくら遅くても少し前方に出る。また亀の所に<sup>うさぎ</sup> 兎が行きますと、いくら少しでも前に出ている。そのように何時までたっても追いつく事が出来ず、追いついたように見えるのは迷いだということです。

これは間違いだということを言うのは難しいです。それを間違いだと証明するのはどうしたらいいのでしょうか。これは数学の無限級数の問題なのです。

ある方法でもってだんだん小さくなっていく数を無限に加えると、小さくなっていく数でも、無限に集めるのだから、無限に大きくなってしまいうように思えますけれども、しかしそうとは限らない。小さくなる、なり方によってはある一定の値になって無限大にはならない。簡単な例でいいますと二分の一ずつ小さくなっていく数を無限に集めると  $1 + 1/2 + 1/4 + 1/8 + \dots$  というように二分の一、二分の一と小さくなっていく数を無限に寄せ集めると、無限大にならず、2 になってしまいます。そういう事も数学的にちゃんと考えれば分かるのですが、小さくなり方によっては有限の値になるということです。無限の数を寄せ集めても無限大にはならない。なることと、ならないことがあって、それを数学的に証明しなくてはならないわけです。それをごまかしてしまうと、<sup>うさぎ</sup> 兎は亀に追いつくことは出来ず、追いついたように見えるのは、迷いだということになるわけです。そういうのをごまかしの議論というのです。

本当は無限に集めても無限大になるとは限らない。こういうのを無限級数といいます。無限級数というのは意外におもしろいもので、ご存知のように円周率は 3.14159 ……と無限に続くのです。今は電子計算機で計算しますから、<sup>いくけた</sup> 幾桁でもわけなく計算出来ますが、円周率を計算するには無限級数の計算をつかわないと出来ないのです。無限級数を使うと<sup>パイ</sup>  $\pi$  の計算が出来る。これも有限の値で無限の値ではないわけです。数学で考えると間違いなんて出来ない。それをいい加減に考えるとそういう間違いが起こるといえるということです。

数学、物理学などでは正確に考えるという事をしますから間違いをしないで本当の真理が得られるわけです。その真理を寄せ集めたものが文化であり人間の偉いところ

です。

ついでに申しておきますが、自然科学の効用とはその応用にあるのではないのです。自然科学の研究、それを応用して飛行機を作ったりロケットを作ったり、また色々な新しいめずらしい物を作ったりします。非常にお金が儲かたり、人間の生活に大きな影響をおよぼしますので、自然科学の偉いところはその応用にあるのだと、多くの人は考えます。しかし科学の価値はその応用にあるのではなく、本当の物を見つけた、本当の物を求めていくというところに科学の偉いところがあるのです。

だから自然科学の研究がそれを応用して人間の世界に福利をもたらす、もたらさな  
いは別問題で、それが本当であるという事の為に<sup>とうと</sup> 貴いのであって、本当であるとい  
うことで人間に大きな影響を与えているわけです。つまり、自然科学の研究をします  
と、世の中の事は嘘やごまかしでは駄目<sup>だめ</sup>だということがわかります。詭弁<sup>きべん</sup>をつかって  
とおすことは出来ても、実際機械をつくったら、嘘なら機械が動きません。自然科学  
を勉強<sup>べんきやう</sup>しますと人間というものをよく考えるようになります。そして嘘やごまかしで  
は駄目<sup>だめ</sup>なのだということを悟らせます。ここに自然科学の偉いところがあるのです。

また、科学をうまく使うといくらかお金<sup>おんげん</sup>が儲かるかもしれません。しかし下手に使  
うとかえって人間を不幸<sup>こんにち</sup>にします。今日、公害問題が非常にやかましく言われてい  
ますが、この公害問題などは自然科学が悪く使われた為に起こったことでありまして、  
ただ応用だけを考えますとそのようにちっとも良いものではありません。

しかし人間が本当に真実に生きること、嘘やごまかしではなく、誠実に生きなけれ  
ば駄目<sup>だめ</sup>なのだという事を、まっこうから教えるところに、自然科学の、その学問の値  
打ちがあるわけです。

今日<sup>こんにち</sup>、大学紛争が問題になりまして、大学で学問ばかり教えて、道徳を教えないか  
らこういう事になったと人はよく言いますけれども、それは間違いで、本当の学問を  
教えればそういうことにはならないのです。

儲ける<sup>もう</sup>為の学問、自分が名声をあげる為の学問、そういう事をやってほんとの学問  
をやらないから人間が悪くなるのです。学問の尊<sup>とうと</sup>さは、人間に真実に生きるという  
ことを本気に悟らせるところにあるので、本当の学問を教えればそれが道徳教育にな  
るのです。

道徳教育といって頭からああしろ、こうしろと言っても人間はよくなる。戦争  
前<sup>しゅうしん</sup>に修身という学科がありましたが、あれでは人間をよくすることは出来ない。そ  
れより、数学でも、物理学でもいい、一生懸命やらせ、「本当」を愛することを体験  
させて、真実でなくてはならないということを身をもって教えるのです。ですから本  
当の学問をすれば人間がよくなるわけです。

### (3) 学問と人間形成

昔、学校で優等賞というものをくれました。今は色々な弊害<sup>へいがい</sup>があるというのでくれ  
ませんが、それに何と書いてあるかといいますと、「学力優等、品行方正<sup>ひんこうほうせい</sup>なることを  
賞する」と書いてあるのです。学力が優等になると品行も方正<sup>ひんこうほうせい</sup>になるのです。それは  
そうです。昔の学校の友達の中でよく学問の出来る人は人間も立派になっております。  
しかし今はそうでなくなって来ているようです。それは本当の学問をしないからです。  
勉強というのは試験でいい点をとるためのものと考えている。そんなつもりでやりま  
すから、人間を本当に真実を愛する者にしない。それどころか競争心を起こして、友

達が病気で休みでもすれば、自分が一番上になれるからいいと考えたりするようになる。いい点さえ取れば学問が出来たと思ってしまうような学問が、人間を良くすることに役立つはずがありません。

本当の教育とは本当の学問を教えればいい。また、本当の学問をすることが教育になる。教育というのは身をもって教えなくては出来ないことで、人格の完成とかいいますが、人格と人格とのぶつかりあいではなくては出来ないことです。それ故教育は技術だと思って面白く分かり易くものを教えることだと考えたら間違いであります、身をもって、人格をもって、その学問の尊さを教えることが教育です。

私が学生の頃に寺田寅彦という物理の偉い先生がおりました。この先生は非常に偉い先生でありましたが、その講義は大変下手なのです。先生の講義がさっぱり分からなくて困っていたら、「要するに」とおっしゃったので、これからは分かるだろうと耳をそばだてて聞いたが、「要するに」だけ分かったがその後はまた全く分からなかったという話があるくらいです。しかし寺田先生程偉い教育者はないのでありまして、寺田先生の指導を受けた方で立派な学者になられた方が沢山おられます。

それは何故かという身をもって学問の面白さ尊さを教えられたからです。だから自分が学問の研究をする態度、そのことがその人を教育していくのであって、人間の教育というのは人格をもって行ってはじめて出来ることだということをよく示す事実だと思います。

寺田寅彦先生は大変随筆がうまくて立派な科学者であります。先生の随筆集は今日でも読まれています。夏目漱石と友達でして、非常に面白いことを書いておられます。有名な言葉に「災害は忘れた頃にやって来る」という言葉がありますが、貴方がたまに時々新聞などで見るとおもいますが、これは寺田寅彦先生が残された言葉です。

そういうふうに本当を愛すること、学問を愛することを身をもって教えることが教育であります。従って学問を教えることによって教育を行なっているのです。本当の学問をすると本当の人間形成が出来るのです。本当の教育が出来る。ここに学問の尊さがある。そういうわけですから科学者の中には信仰を持った人も大変多くいます。

偉い物理学者を十人ってみますと皆と言わないまでも九人までは信仰を持っています。ニュートン、ファラデー、近頃の学者ではデンマークのニールス・ボーア、アメリカの原子爆弾を作ったオッペンハイマー<sup>(19)</sup>等もやはり信仰を持っています。ただ一人偉い物理学者で信仰を持っていないのが、キュリーの娘<sup>(20)</sup>と結婚したジョリオ・キュリー<sup>(21)</sup>です。この人は唯物論者で共産主義者であり、人間としては立派でありますけれど信仰を持っていません。その他偉い物理学者をあげますとたいい信仰を持っています。それは真理を愛し真実を求めて、また真実を愛することを身をもって体験した人々だから、一番大きな真理であるところの信仰を持つということになるわけです。

本当に真実を求め、嘘ごまかしをしりぞける精神が強ければ、人は信仰を持たざるを得なくなってくると思います。人間というのは得手勝手なもので何でも自分の都合のいいような考え方をする傾向を持っているものですが、ごまかさないうで自分の姿を見つめる時、自分は本当に完全でなく、罪に汚れた者である事に気付いて、どうにかして罪より救われなければならないことを真剣に考えるようになります。

#### (4) 真理と福音

キリスト教の信仰を一口に言いますと、罪の赦しの十字架の福音ということです。人間の罪というものは人間の努力によっては救われないもので、人間の努力によって完全になろうとしても後から後から罪の芽が出てきてそれをおさえることは出来ないことに気付きます。どうにかして罪から清められる道はないものかと一生懸命求めておられますとき、おまえの罪の結果、受くべき罰をキリストが代りに受けて下さったから、おまえの罪はすっかり赦されたと教えられますと、これより他に自分の生きる道はないということが分かってキリスト教の信仰を持つようになるわけです。

つまりごまかさないうで真剣に考えていくと、どうしてもこの信仰を持たざるを得なくなってくる。科学者も本当にごまかさないうで物事を考える、その間に信仰を持たざるを得なくなってくるわけです。

物事をよくみて、良く考えて、そして実証するという事を自然科学という言葉をお話して来たわけですが、また、別の言い方をすれば真理を愛するという言い方をしてもいいと思うのです。真理を愛することからフィロソフィア、英語にするとフィロソフィー (Philosophy) という言葉が出てきたわけです。

これくらいの事は誰でもしている、これくらいのことは他の人だってするからいいやと、ごまかしておれば信仰を持たないで済みます。しかしごまかしてはならないという事が分かっているれば、最後には信仰を持たざるを得なくなってくるわけです。

このように信仰も自然科学も共に真理を愛するものであり、真理を強く求めるものである点において一致している。それ故に自然科学者の中に信仰を持つ人が多いという事を申し上げましたが、もう一つ自然科学を通して信仰が大事だということを教える道は、人間の知恵が不完全であるということです。総てのものが完全には分からない。ここまでは人間の知恵で分かるけれども、これから先は人間の知恵では分からないものであって神様から真理を示してもらわなくては駄目だというものがあるわけです。元来自然科学の教える真理というものは一種の条件つきで、これまでは分かるがこれから先は分からないという限度があるわけです。自然科学者は人間の知恵を極度に働かせますから、人間の知恵の限界というものにぶつかります。そこでこれ以上は神様に示されなければならないという事を考えます。それで信仰を持つ人が多くなってきているわけです。自然科学には限界があるということを知っている故に知って

いますから、科学でもってすべてのことが説明出来るなどとは考えていません。しかし科学によって人間の生活に革命を起こすような大きな影響を及ぼしている為、科学の力を過信して、何でも科学で解決出来るという、科学万能思想などが出てきます。それは 19 世紀のことです。例えば 19 世紀には蒸気機関が發明された結果、その産業構造が非常に変わった。また、ダーウィンが進化論を考えました。ダーウィン自身は信仰を持っていましたが、信仰のない人々が進化論によってすべてのことがよく進化して行って、これですべての問題が解決されるから神様なんかいないということを考え、何でも科学で解決出来ると考えたわけです。しかし科学は決して万能のものではなくその力の及ぶ範囲は限られたもので、狭い範囲のものにしか適用出来ないのだという事を忘れてしまったわけです。

私は神様の深いご配慮だと思のですが、科学万能思想が起こる 19 世紀に、すでに、科学の真理というのは絶対的なものではなくて、限られたもので、その適用範囲も限られているということを示す大きな<sup>(22)</sup>学問が起こったのです。

それは非ユークリッドの幾何学です。

幾何学というのはエジプトで始まりましたが、ギリシャ時代のユークリッドという人がその幾何学の真理を系統的に集めて大成したので、ユークリッド幾何学と呼ばれています。ユークリッド幾何学の有名な定理は三角形の内角の和は二直角に等しいということです。フランスの偉い数学者で哲学者のパスカルという人は非常に頭がよく 12 歳の時に人に教わらないでこの三角形の内角の和は二直角に等しいという事を証明したのです。そして証明が出来たという事で非常に喜んだ。人間が真理を発見すると喜ぶものです。ある問題を解こうとして、それが解けると非常に嬉しい。単に試験にいい点をとろうとする勉強からはこの喜びが生まれません。諸君も本当に学問をしますと、その真理の尊さが分かって来て、この事が分かりますと学校で新しい真理を学ぶことが嬉しくなってきました。本当に学問の面白さの為に勉強して欲しいと思うのです。

幾何学には公理というものが幾つかありますが、これを用いて証明して少しも間違いがないというふうにいろいろな真理を沢山研究して行って、出来たものが幾何学の体系です。理論的に非常に整然としておりますので、非常に偉い学問の例としてあげられております。その幾何学も、その初めの公理に異なった公理をとりますと、異なった答えが出てくる。異なった公理をとるとり方によってユークリッドが研究した幾何学と異なった幾何学が出来るというので、それを非ユークリッドの幾何学と呼びます。それも研究した人の名前によって、ロバチェフスキーの幾何学、リーマンの幾何学といわれる二種類があるわけです。片方は三角形の内角の和は二直角よりも小さく、その違いは面積に関係するといえます。もう一方は三角形の内角の和は二直角よりも大きいということです。つまり一点を通過して一つの直線に平行な直線は一つしかないとい

うのがユークリッドの公理ですが、沢山ある、あるいは一本もないという公理をとりますと、また違った幾何学の体系が出来るというわけです。

このように非ユークリッドの幾何学というのが18世紀の終わりから19世紀の半ばにかけて、ちょうど、科学万能思想の起こる少し前に発達いたしまして、人間の知恵というものが完全なものではなく、条件つきなものだということを示したわけです。ですから科学者は決して科学万能思想などは持たないのですが、科学を知らない人がそういう万能思想を持ったのです。このように科学万能思想が起こる時にすでに、科学万能なんてあり得ないということを示す非ユークリッド幾何学というのが発展したのです。自然科学をよく理解しない哲学が、科学万能思想を持ってしまったのです。

### (5) 自然科学と信仰

マルクスという学者が唯物論的な経済を立てたがそれが唯物的共産主義であります。元来共産主義は自分一人でもいい事をしないで皆でそれを分け合うというので非常にいいものなんです、マルクスが唯物論になってしまい、非常に害を流すことになったわけです。学問的に立派な形をとっているように見えますので、これに賛成する人もありますが、物をよく見ない、考えない、また実証しないというところに唯物論者の間違いがあるのです。

唯物論者はアメリカの南北戦争についても、あれは奴隷解放の聖戦だといわれているが、それは間違いで南部では奴隷を使わなくてはならないような経済事情があったが、北部の方では、奴隷を使わなくてもいいような経済事情にあった。そういう経済事情と、経済事情の間の戦争で、別に奴隷解放の聖戦ではないということと言ったんですが、それはよく事情を見ないのであります。経済的事情も確かにあったでしょうが、しかし、南北戦争の少し前にストー夫人の『アンクル・トムの小屋』という小説が出まして、アメリカで非常に売れ、沢山の人が読んで、奴隷制度というものはいけないものだという事を心の底に銘じたそのことが奴隷解放運動に対する非常に大きな力になったのです。また、アメリカでロイド・ギャリソンという人が奴隷制度がいけないということを示すために『リベレーター (Liberator)』(解放者という意味)という雑誌を出していました。奴隷制度がいけないということをもっと先に世界に向けて言った人で、奴隷制度が廃止されるとその雑誌を出すことをやめました。非常に偉い人です。奴隷を使うことがよいと考えている人達はお金を出して印刷屋を買収したりして、この雑誌を止めさせようとしたんですが、彼は自分で植字技術を覚え、自分で印刷機械を手に入れ雑誌を出したのです。

そういうことがありまして、アメリカの人達に奴隷解放の精神を吹き込みましたから、その精神が大きくなって遂に南北戦争となったのです。

南北戦争が起こるについては、そういういろいろな背景があったのですが、マルク

ス主義者はそういうことは余り見ないで経済的な事情だけを見て、南北戦争は奴隷解放の聖戦でないと言うのです。こういうことはつまり科学的ではないわけです。物をよく見ないで、考えないで、実証しないということです。

マルクスの経済学は非常に科学的だといいますが、私達、物理学をやった者から見ますと、少しも科学的ではなく、かえって非科学的です。科学的に間違いを沢山しているからマルクスの経済学による社会がうまくいかないわけです。マルクス主義、共産主義の国家がソ連に出来まして50年以上になったわけです。1918年<sup>(23)</sup>に共産主義になりましたが、50年以上になってもうまくいかない。それはもともになる学問が間違っている、唯物論であるところが間違っていたからです。唯物論的であって宗教を弾圧しておりますけれど、弾圧しきれなくなって、間もなく宗教を黙認するようになり、今では宗教を利用するようになっているようです。そういう間違いをしております為に社会状態がうまくいかないのです。そういうことからして実証してみると唯物論というのは、間違っているということがわかるわけです。唯物論の世界では内部争いが起こる。それが一つの特徴であり、間違っている証拠だと言わなければなりません。ソ連においても血の粛正が起こる。中国においても粛正反対論者をひどく迫害するという内部争いがおこる。日本でもその真似をしている学生達の中で内ゲバという内部争いが起こっています。これらは共産主義の学問、唯物論の学問が間違っている証拠であり、間違っているから本当の科学にはならないのです。

先程19世紀の科学が少しゆきすぎで、科学万能思想というのが起こったと申しましたが、20世紀になりましてから、信仰的要素を科学が入れるようになったアインシュタインの相対性原理により、科学が今までの科学的考えとは全く違った信仰的な要素が入った学問になりました。特に物理学がそうなりますと、物理学の方では今まで全く予想もしなかった結果が出てくるのです。

その著しい例をあげますと、不確定性原理というのがあります。

今まで、正確に観測すれば、正確にいろんな状態を予言出来ると、即ちある時点における太陽のまわりの地球の位置をきちんと決めて、地球がどちらの方向にどれだけの速度で動いているかという事（これを運動量という）を決めると、それから後のどんな状態でも正確に予言出来るということを信じておりました。そして本当に予言出来たのですが、しかしそれは絶対的なものではないという事が分かってきているのです。といいますのは、その位置と運動量をきちんと与えればその後の正確な地球の状態がきちんと計算できる、予言出来るというのが、今までの物理学でありましたが、位置を正確に決めると運動量を正確に決めることが出来ない。反対に運動量を正確に決めようとする位置が正確に決められなくなる。運動量と位置とをかけたものにある限度がある。その限度は非常に小さいものですので、これまで気付かれなかったが限度があるから正確に運動量を決めさえすれば、それから後のことは何でも正確に決

めることが出来るということは言えなくなったわけです。

そういうことも自然科学の力ではどうにもならないものがあるという事を示す一つの例です。

そういうわけで、人間が何でも分かるというものでない事を悟り、人間が謙遜になり、そして非常な進歩をすることが出来るようになったわけです。20世紀になって科学が進歩したので、科学万能になるかと思うと、逆の方向に進歩したが故に、科学万能的なことは駄目だということが分かって、信仰的になっているのです。

要するに人間というのは真実でなければならない、本当のものを持たなくてはいけない。嘘やごまかしでは駄目であり、その結果、科学が発達した。科学というのは真理を教えるものです。

聖書のコリント人への第二の手紙の13章8節に「わたしたちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある」という言葉がありますが、そのとおりに、私達が真理に従えば本当にえらい力が得られるし、真理に逆らっては何も出来ないのです。

自然科学はそのことを教えてくれますし、皆が真理に従わなくてはならないということを知っています。それ故、自然科学が非常に人間に役に立つといえるのであります。

1970年7月29日 岩手県山形村川井<sup>(24)</sup>にて

(『白樺のふるさと』岩手三愛農村塾出版会、所収)

## 13-5 M君、Tさん結婚式式辞

人生の目的は、神を知り神に喜ばれる人間となって、神と人とを愛することができるようになることである。そして永遠の生命が与えられ、天地が失せても失せないものをつかむことである。これが人格の完成であり、人間形成であり、これが教育の真の目的である。これができなければ、<sup>きよまん</sup>巨万の富を得ても大きな権力を握っても人生は失敗の人生である。

豊臣秀吉が「世の中に<sup>われ</sup>我にも似たる人もがな、生きて<sup>かい</sup>甲斐なきことを語らん」という歌を作ったということである。いくら出世してもつまらないものだといっても、出世しない人はそれをほんとにしないので話が合わない。秀吉のように出世した人が他にあれば話が合っているがという意味である。また「<sup>つゆ</sup>露と<sup>つゆ</sup>落ち露と消えにし<sup>わがみ</sup>我身かな、<sup>なにわ</sup>浪華のことも<sup>じせい</sup>夢のまた夢」という辞世を残したというのも有名な話である。

それゆえ立身出世主義の教育は誤りである。これは言いかえれば<sup>かねもう</sup>金儲けのための教育である。日本の教育が明治以来立身出世主義であるがゆえに今日の如く崩壊してしまったのである。社会を良くして行くべき教育がこんなになっては日本の国がどうなるか心配である。ほんとうの教育は信仰なしではできないものである。信仰を拒否したがゆえにこんなになったのである。私はこう確信しているが、信仰がなくても教育ができると考えている人も多いと思う。しかし<sup>かねもう</sup>金儲けのためでは教育はできないことだけはわからなければならない。

お二人とも信仰をもって教育の仕事をなさっている。これは大変大きなことである。日本の教育の再建の<sup>もと</sup>基になることである。その上お二人が結婚なさるのである。これは一層大きなことである。というのは結婚は人格の完成のためであるからである。教育は人格と人格のふれあいである。単なる知識の切り売りではない。教育者が自ら人格の完成につとめ身をもって教育を行うのである。人間は結婚によって結ばれて二人の者が一体となって完成するように創られているのである。人間は結婚によって一層よく神を知るようになるからである。これがマルコ伝 10 章 6 ~ 9 節<sup>(25)</sup>の意味するところである。

神と人との関係は夫婦の関係に似ている。ホセア書には神を「我が夫、イシイ」と呼ぶということが記されている<sup>(26)</sup>。コリント後書 11 章 2・3 節に「私は神の熱情をもってあなたがたを熱愛している。あなたがたを清いおとめとして、<sup>ただ</sup>唯一人の男子キリストにささげるために婚約させたのである。ただ恐れるのは、エバが蛇の悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されてキリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである」とある。貞操は、<sup>ていそう</sup>純潔とした方がよい。

夫婦の間は純情と純潔じゆんけつとをもって結ばれなければならない。夫は純情と純潔じゆんけつとをもって妻に対し、妻は夫に対する純情と純潔じゆんけつとをもってして初めて夫婦と言えるのである。そうでなければ夫婦とは言えない。単に男女べんぎじょうが便宜上共同生活をしているに過ぎないのである。結婚によって純情と純潔じゆんけつの何たるかを知って、その純情と純潔じゆんけつとをもって神を信ずるのである。

また結婚によって親子の関係が生ずる。神と人との関係は親子の関係に似ている。主しゆの祈りの初めに、「我らの父よ」とあるが、この一句にキリスト教のすべてが含まれているときえ言われている。この世に夫婦・親子の関係があるのは神との関係を悟らせるためである。

また、夫婦・親子の間で真の愛が行われるようになる。愛とは自分を犠牲ぎせいにして他の人のためにつくすことである。母親は自分を犠牲ぎせいにしても子のためにつくす。自分を捨てて配偶者を愛する夫婦は沢山たくさんある。

この他に世の中には結婚して知り得る真理たくさんが沢山ある。真理を知って、真理に従って生きようになることが、人格の完成である。ここに結婚の真の意義がある。結婚とうとが貴いのはこのためである。

お二人が結婚なさって、ますます人格の完成に努めることは、教育者として最も大切なことである。先にも申しましたが、教育とは人格と人格とのふれあいである。人間は神に造られたものとして人格つくを持っている。実は人格とは元来神のお持ちになっているものである。

人は神に似せて造られたと聖書にあるが、それは人格つくを持っているという事である。それゆえ「人格」と、人の格と書くのはおかしいのである。被造物ひぞうぶつの中では人間のみが持っているものであるから、日本語では人格と訳したが、ラテン語ではペルソナという。どんな唯物論者ゆいぶつろんしゃでも人間各自が一人一人特有の人格を持ったものであることは信じている。基本的人権というものも人格に関するものである。人格を持った人間は全世界ともかけがえのない価値を持っている。キリストも「人が全世界をもうけても自分の命を損したらなんの得になろうか」とおっしゃった。人格は物質に較べたら無限の価値を持っている。信仰のない日本の最高裁判所の判決例にも、人の命は地球よりも重いという言葉がある。

教育とは学問を教えて、人格うちを育てることである。人間は内に無限の価値あるものを持っているから、それを引き出すのが教育である。ヨーロッパ語の教育という言葉は皆、引き出すという意味であるのはこのためである。人格を引き出すものは人格である。鉄を引っばるものは鉄でできている磁石である。教育が人格と人格とのふれあいだというのはこのことを言っているのである。だから教育者は身をもって教育するのである。

お二人が教育を行い、乱れてしまっている日本の教育の再建の一つの礎いしづえとなると

いうことは、非常に有意義なことである。

どうかお二人が力を合わせ、神に依りすがってこの結婚を完成されんことを心より願ひ、この結婚の上に神の特別の祝福あらんことを祈る次第である。

(『通信』第 19 号、1970 年 8 月 1 日)

13-6 村山道雄<sup>ついでとう</sup>追悼<sup>じ</sup>の辞

村山道雄先生は、学生時代に矢内原忠雄<sup>やないほらただお</sup>先生の植民政策の講義を聞かれ、植民地を搾取<sup>さくしゆ</sup>するのではないほんとの植民政策を学び、感激し、大学卒業後それを実践<sup>じっせん</sup>するために朝鮮総督府<sup>ちょうせんそうとくふ</sup><sup>(27)</sup>に勤務なさいました。矢内原先生<sup>やないほら</sup>の学問だけでなく、信仰も学びまして、キリスト教の信仰をもって、植民地<sup>およ</sup>及び内地<sup>ないち</sup>で公務員として働かれました。腐った日本の官吏<sup>かんり</sup>の社会にあって、キリスト教の信仰をつらぬかれたということは非常に大きなことであります。

1945年（昭和20年）に官選<sup>(28)</sup>の山形県知事になり、1947年（昭和22年）に最初の民選知事<sup>(29)</sup>に当選し、20年にわたり信仰を持った知事および国会議員として山形県政<sup>しんぶう</sup>に新風を吹き込まれました。特に教育に力を入れられて、山形県の教育を非常に改善されました。残念なことにはその後行われた教育委員公選<sup>(30)</sup>の廃止と教師の勤務<sup>こんにち</sup>評定の実施のために、山形県の教育も他の県の教育と同じく悪くなり、今日の教育の崩壊をもたらしました。1959年（昭和34年）参議院議員に当選しましたが、一期六年だけで、政治家の策動<sup>(31)</sup>によって、多分信仰を持っておられるが故に、自民党公認候補とされず、政界から隠退<sup>いんたい</sup>されました。知事を辞めて後も山形県を愛され、山形に長く<sup>とど</sup>留まっておられましたが、後東京<sup>のち</sup>に居<sup>きよ</sup>を移されました。

キリスト  
基督教独立学園との関係は創立の時からであります。創立の計画を申しあげたら、大変に喜ばれて何かと御援助<sup>ご</sup>下さった。高等学校の認可は県ですが、教育関係の財団法人の認可は文部省ですることになっていて、県の認可は1948年（昭和23年）の新制高等学校の発足と同時にありましたが、文部省が法人<sup>あま</sup>の認可を余り小さいという理由で渋っていて、一年近くたっても認可しない。教育は少数ほどよいではないかといっても、常識的に限度があると言って認可しない。利権でも欲しく法人認可を申請するのではない、文部省で出来ない教育をしてやろうとしているのである。何も文部省に頭を下げる必要はない。大学へ行きたい人は検定試験を受ければよいから、資格等はいらないといって廃校届を出したら、村山先生はそれを握ったまま文部省と交渉して下さって、一年遅れて認可され、高等学校として続けることになりました。村山先生は言わば独立学園の生みの親であります。

その後文部省の心配<sup>かかわ</sup>にも拘<sup>くわ</sup>らず、小さいが故に健全に成長し、受験準備教育のために日本の教育<sup>こうはい</sup>が荒廃した中<sup>ちゆう</sup>にあってほんとの教育を守ることが出来ました。

20年前に独立学園を後援するために、基督教独立学園維持会<sup>キリスト</sup>が出来まして、村山先生が会長になって下さいました。そして公職<sup>きんしつ</sup>をすべて辞められました後も、維持会会長だけは続けて下さいまして、独立学園がほんとの教育<sup>まも</sup>を護<sup>まも</sup>るために、どの位<sup>くら</sup>力

になって下さったかわからないのであります。

村山先生が<sup>キリスト</sup>基督教独立学園に対し信仰による真の愛をもって、創立以来、<sup>かげ</sup>陰になり  
<sup>ひなた</sup>日向になりお助け下さったことを思い、心からの感謝をもって、村山先生を天国にお  
<sup>いた</sup>送り致します。

## 13-7 佐藤のぶ告別式式辞

1982年3月12日 米沢市南原笹野公民館<sup>みなみはらさきの</sup>

佐藤のぶ様の御生涯は、この世的に考えますと大変不幸な御生涯でございました。

若くしてくる病にかかられまして、そして体の発育も止まり、非常に不自由な生活をしなければならぬのでございました。本当に若い時、小さい時から、苦しみを背負って生きて行くという非常に不幸な生涯でございました。けれども、佐藤さんのすぐお向いが橋爪様のお家<sup>はしづめ</sup>でございました、その頃、橋爪様の弟の橋爪善雄様<sup>はしづめよしお</sup>がキリスト教の信仰を持っておられました。橋爪様は関西の方で、事業で大きな仕事をなされ成功なさっておられましたので、こちらにおける時が少なかったのではありますけれども、無事かえって参られて、そして佐藤のぶさんを信仰に導かれまして、それでのぶさんは生き返って、御自分の体が不自由であるというその苦痛の故に、苦難の故に、信仰をもつことが出来るようになりました。それから本当に信仰におきまして、この世のあらゆる苦難にうち勝って、そして七十五年の御生涯<sup>ごまこと</sup>を全うなされたのでございました。

私とのぶさんとの関係は、私が1933年（昭和8年）に小国の地<sup>おくに</sup>に移って参りまして、そうして1934年（昭和9年）の四月に不幸な甥<sup>おい</sup>を叶水<sup>かのみず</sup>の家に連れて参りまして一緒に育ててやることになりました。その甥<sup>おい</sup>が叶水<sup>かのみず</sup>に参りまして三週間足らずで雪解けの冷たい川の中に落ちまして死亡するということが起こり、その事が新聞の記事に載りました。佐藤のぶさんはその記事を読みまして、私のところに手紙を下さいました。そのことから私<sup>たず</sup>がのぶさんの所にお訪ねするというふうになりました。それは1934年（昭和9年）のことで、48年前からの交わりでございました。私が佐藤のぶさんのお宅に参りますと、お宅の方々は信仰を持っておられませんでした。けれども本当に良い方々でありまして、身体障害を持ったのぶさん<sup>いたわ</sup>を労って、のぶさんを中心として、本当にうるわしい家庭を作っておられました。その頃はおばあ様もおられ、お父様、お母様、それから御きょうだいの方々ののぶさんを中心<sup>ご</sup>にうるわしい家庭を築いておられたのでありまして、私ものぶさんの所<sup>たず</sup>をお訪ねすることを楽しみにしておりました。

それでものぶさんはやはり不幸が続きまして、おばあ様が亡くなり、お父様も亡くなり、お母様もなくなり、一番上のお兄さんは、戦死<sup>しけい</sup>され次兄<sup>つぎお</sup>であられた次男<sup>ご</sup>さんも亡くなり、御きょうだいの成<sup>ご</sup>さんも亡くなり、本当に不幸な御状態<sup>ご</sup>でございましたけれども、のぶさんを中心として、本当に愛の家庭を作っておられたので、この世的には非常に不幸のよう<sup>ご</sup>でございましたけれども、本当に温かい、うるわしい御家庭でありました。

晩年になりまして、もう皆様に死なれたり、家を出られたりいたしまして、今、米沢の市立病院に入院しておりますお姉さんのこう様と二人きりになってしましまして、そしてのぶさんは今泉の老人ホームに暮らすというような本当に、不幸な御生涯でありましたけれども、しかしその間にずっと信仰をもってそれに耐えて来られて、すべての苦難に打ち勝たれて信仰を全うされたのでございます。

本当に弱い身体でよくも 75 年の生涯を全うされた。これは本当に信仰の力であると思います。この世的に考えますと、非常に不幸な御生涯であられましたけれども、しかし信仰をもたれ、そしてすべての苦難にうち勝たれたのであります。

のぶさんの信仰といいますのは、一口にいいますと、罪のゆるしの十字架の福音といわれているキリスト教の信仰であります。私達は皆いつも罪をおかしている。聖い神の前に出まするといって皆が罪人なのであります。いわゆる立派な人、人格者といわれているような人でも、やはり罪人でありまして、このままでは神の前に出られないのであります。それを神の子のキリストがこの地上においてになって、人を救いに導く道を完成なさったのであります。

昔から沢山の人が神の前に正しくなろうと思っても正しくなれないで、色々悩みました。そして救い主が犠牲になった。十字架の刑に処せられる、そういう残酷な死に方をいたしました。その犠牲によって人の罪が皆ゆるされるのだという信仰であります。どこのどういう人かわからない人が犠牲になって死んでくれて、それでどうして私の罪が救われるのか、罪から清められるのかということは理屈を言えばわからないことですけれども、しかしいくら一生懸命に立派な人間になろうとして努力しても立派な人間になることは出来ない、罪に汚れた最大の罪人であるということを感じました人が、どうかして罪より救われようと一生懸命になりますと、キリストが十字架にかけられて、その血によって私達は皆救われるのだということがわかります。そして亡くなる近くになりまして、喜びにあふれる、感謝にあふれる、そういう生活が出来るのです。のぶさんはその信仰をもちましたが故に、本当にこの世的に考えれば不幸な御生涯ではありましたが喜びと感謝にあふれる御生涯を全うされました。本当に不憫な生活だったかも知れませんが、心では豊かな生活を全ういたしました。そして 17 日に神のもとに召されたのであります。人はどんなに成功して立派になりまして、彼方までもっていくことの出来ないものであり、ですからどんなに成功した人でも、出世した人でも死ぬ時にはつまらなかったと言って死んでいったのであります。

人間のうちで最も出世したといわれる豊臣秀吉が、こういう歌を作っております。「世の中に、我にも似たる人もがな、生きて甲斐なきことを語らん」という、秀吉が百姓から太閤になるほど出世しても、ちっともつまらない。つまらないといっても誰も相手にしてくれない。太閤になったら文句はないじゃありませんかと言って誰も

相手にしてくれません。が、もし秀吉と同じように太閤たいこうになるほどの出世をした人があれば、その人とはいくら出世してもつまらないと語りあって、互いに慰めあう事ができる、そういう人があればいいなあという歌であります。どうしても信仰によって死の問題を解決してくれなければ、どんなに出世しても金持になっても、なんにしてもつまらないと言って死んでいかなければならないのです。

天地始終てんちしじゅうなく、人生生死せいしあり

(天地は始めも終わりもなく、永遠に続く。

ところが、人生わずか50年である。)

これは頼山陽らいさんよう<sup>(32)</sup>の詩であります。天地は永遠に続くかに見える。それに比べれば、人生はわずか50年か60年の短いもので、本当にはかないものである。そういう詩ですが、この天地はやがて時が来ると滅びてしまうものであります。頼山陽が永遠に続くと考えましたけれども、それはまちがいで、天地はいつか時が来ると滅びてしまいます。天地が滅びても滅びないものはそれは信仰であります。

私共の信仰の先生 — のぶさんは直接お会いしたことはありませんけれども、のぶさんの先生でもあります内村鑑三先生 — が、天地が失せても失せないものをつかむことが出来て、人生は本当の成功であると申しておられます。人間は、信仰によって、天地が滅びても滅びない永遠の生命を得ることが出来る。それを教えてくれているのはキリスト教であります。そうしてその天地が失せても失せないものをつかむことが出来て、人生は初めて成功したといえる。それでなければ秀吉のように、いくら出世してもつまらないと言って死んでいかななくてはならないのであります。のぶさんは、その天地が失せても失せないものをつかんで死んで逝かれたのですから、本当の意味で最も成功した生涯でございます。

またそれであるからこそ、この世的に考えるとのぶさんの生涯は非常に苦難に満ちた生涯と思えるのに、それに打ち勝って、喜びと感謝と希望とを持って死んで行かれたのだから、先程読んで頂きました聖書の言葉（コリント人への第一の手紙 15章 50～58節<sup>(33)</sup>）の通りであります。

このようにこの天地万物が無限に続いていくのではなくて、ある時期が来ると天変地異てんべんちいが起りまして、新しい天、新しい地が出来る。そういうことを聖書は教えているのであります。そんな事を言うと、そんなバカな事がと多くの人は申しますけれども、近代の科学もそういう事を教えておる。この世というものはいつまでも永遠に続いていくというのではなくて、続いて行くとすれば、死んだような何もない世界になってしまう。どうしてもこれはある時期に天変地異が起って、新しい天、新しい地、新しい道が出来なければならないということを教えておるのであります。

その時の光景というのはどんなに壮大なものであるか、小さな人間の考えをもってしては到底想像することは出来ないのでありますけれども、音楽は時間の流れだけの

芸術でありますから、だから割合にその壮大さ、雄大さというのを表わすことが出来る。

殊に音楽の中でもラッパの音というのは非常に雄大<sup>(34)</sup>な壮大なものでありますので、ここに終わりのラッパの響きと共に、またたくまに一瞬にして変えられる。というのはラッパが響いて、死人は朽ちないものに甦<sup>よみがえ</sup>らせられ、私達は変えられるからです。この世の終りの時が来た時には死んだ人は復活し、その時に生きておった人はちょうど、サナギが蝶<sup>ちょう</sup>ちょうになるように変えられて、この不完全な体ではなく完全な体を与えられて復活する。そうして天国が完成するというのが聖書の教えなのです。なぜならこの朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就<sup>じょうじゆ</sup>するのである。死が負けてしまって、死に勝つことが出来る。死は勝利に呑まれてしまった。死よお前の勝利はどこにあるのか、死よお前のとげはどこにあるのか。死に打ち勝って永遠の生命を与えてくれるものでなければ、この死の問題を解決してくれるものではない。

私共は皆この世の終りの時に復活する、甦<sup>よみがえ</sup>る。そして今のような不完全な体ではなくして、完全な霊体<sup>れいたい</sup>といいますか、霊の体というものを与えられて、永遠に生きることが出来るようになるのであります。その信仰をもってはじめて人生は成功と言えるのであります。それを持たなければ、どんなに出世しても、金持<sup>かねもち</sup>になっても、権力を握っても、それは空しい生涯<sup>むな</sup>であります。でありますから、佐藤のぶさんの御生涯<sup>ご</sup>は、この世的にいいますと、さびしいつまらない生涯のように見えますけれども、実は最も成功した輝く御生涯<sup>ご</sup>であったと言わなければならないのであります。のぶさんのことを信仰の先生方が聞きまして、色々はげまし、力づけてくれまして、近頃では多くの方が、この山形を訪れになる時には、のぶさんをお訪ね<sup>たず</sup>するというのが沢山<sup>たくさん</sup>におこって、本当にのぶさんの御生涯<sup>ご</sup>は恵まれた、光栄ある御生涯<sup>ご</sup>であります。

内村先生につくられました歌にこういう歌があります。「天地の揺らぐラッパの一声<sup>ひとこえ</sup>に甦<sup>よみがえ</sup>らん春の曙<sup>あけぼの</sup>」<sup>(35)</sup>というのであります。天変地異がおこって、そして新しい天地が出来るのでありますから、天地の揺らぐラッパの一声に、罪の身も皆甦<sup>よみがえ</sup>ってそして天国の民となることができるのであります。歌としては形式的にはあまり良いとは言えないかも知れませんが、非常に雄大な思想をもった偉い歌であると思います。

世界中でキリストの復活を記念いたします。復活祭といいますが、復活祭というのは暦の上で少し面倒でありますので、春分の後の初めての満月のあとの、その初めての日曜日を復活祭ということにしています。ですから年によって違います。今年は四月の十一日が復活祭でありますけれども、なにもその日がどうのということではないので、春になりまして、復活するのだということを記念いたします。本当に内村先生

の歌の通りですね。

「天地あめつちの、揺ゆらぐラッパのひとこえ一声に 甦よみがえるらん 春あけぼのの 曙」。

のぶさんもこの春の初めめに召めされました。そして神かみの御許ごもとに、イエス様ごのふとこ  
ろにこいだかれておられるのです。この信仰しんぎょうをもたれたのぶさんの御生涯ごせいがいは、本当に成功せいこう  
した尊とうとい、偉ゐい生涯せいがいであると言いわなくてはならないと思います。

## 13-8 政池仁と私

小国伝道は内村先生の若い時からの夢であった。先生は地図を見て小国地方は山形県の中でも山に囲まれた別天地であるから、ここには日本古来の淳風<sup>(37)</sup>が残っているだろうから、欧米化されない純粹のキリスト教を伝えたら、と考えていたが実現されなくて居た。1924年頃、内村聖書研究会内に伝道熱がさかんになり、「世界伝道協賛会」が出来、シュヴァイツァーの事業を援助するとか、中国<sup>(38)</sup>内地伝道に寄附するとかということになった。それで内村先生は兼ねてからの念願であった小国伝道を実行することにした。1924年夏に政池仁、横山喜之両君が小国に派遣された。同時に岩手県九戸郡に湯沢、鱒崎の両君が派遣されたが、湯沢君が病気をしたので途中で引揚げたので、それきりになった。小国の方は横山君が帰った後も政池君は後に残って、地理や植物を調べ、小国の町の子供達と友達になったので、東京へ帰ってからも子供達と文通し、また来て下さいと言われていたので断絶しないで続いたのである。内村先生は二人ずつで行けと言って居られたので、1928年から私も参加するようになった。政池兄は父上の御葬式や静岡高等学校の校長との関係で小国へ行けなくて、私が他の友人を頼んで二人で行ったことが数回あり、私が一番多く小国伝道に行ったことになったが、小国伝道が続いたのは、政池兄の小国に対する愛のためであった。

内村先生 召天後、私は如何なる伝道法をとるべきと考えた。教会を信仰の母体とすると中世のキリスト教会のような誤りに陥るから、学校を信仰の母体としようと考えて、農村に学校を建てる<sup>(39)</sup>ことにした。なお内村先生に教えられた偉いことの一つは、万人は靈的に平等であるということである。人は誰でも神に直接導かれて立派に信仰を保つことが出来るのである。山の中の人でも勉強すれば信仰を持つことが出来るから山の中の人に勉強して貰うために学校を建てるのである。

どこに建てるかと計画を練って行くと、小国にということが自然の結論であった。しかし小国は政池兄の愛する伝道地である。これを横取りすることにならないかという心配が起こる。伝道法が異なり、私は教育を通してであり、協同して伝道することが出来るのではないかとよく話し合っただけであったのである。私は小国に定住して学校をもって、政池兄は時々来て口と筆とをもって伝道することにした。

私は1932年に大学を辞めて準備をし、33年12月に小国に移住し、34年9月半日働いて半日勉強するという基督教独立学校を創設した。政池兄は33年に静岡高等学校を辞めて東京に移り、独立伝道の途に入り、まず手始めに『リビングストーン伝』を執筆し始めた。そして1934年10月に小国を対象として『聖書の農村』が発刊された。第一号は政池と鈴木との共同のものとして発行されたが、責任をはっきりさせる

必要から第二号からは政池まさいけが全責任を負い、鈴木は寄稿者となる旨むねが記されている。

二人でよく話し合っあて始めたことであるが、私が小国おぐにに定住するとすると私が主導的になる恐れがある。私は『聖書の農村』には少ししか寄稿出来なかったし、政池兄まさいけいが小国おぐにに来ることも多くなおらなかった。小国おぐにを愛した政池兄まさいけいにとって辛いことでああらう。これは政池兄まさいけいが譲り難（40）きを譲ったことになる。神はこの政池兄まさいけいの愛を嘉よみし、政池兄まさいけいを恵たまひ給うた。『聖書の農村』は小国おぐに以外の読者を次第に増し加えられ、読者層が全国に拡がり、1938年1月より『聖書の日本』と改められ、非常に優れた伝道雑誌とななって（41）政池兄まさいけいによき働き場所が与えられたのである。

『おとこえしの花『聖書の日本』終刊記念感謝文集』所収

（原題『聖書の農村』 はじまりの頃）

## 【 註・XIII章 】

- 
- (1) 病気で床につくこと。
- (2) 自分の体内で生じた有毒物質によって起こる中毒症。
- (3) 節を折る。 <sup>せつ</sup> <sup>お</sup> <sup>こころざし</sup> <sup>ま</sup> 志 を曲げて人に従うこと。
- (4) (新共同訳)「なぜなら、主は愛する者を鍛え、／子として受け入れる者を皆、／鞭打たれるからである。」(ヘブライ人への手紙 12 章 6 節)
- (5) (新共同訳)「いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。」(ヘブライ人への手紙 12 章 7 節)
- (6) 原書では、功を建てた。
- (7) (新共同訳)「この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」(コリントの信徒への手紙二 4 章 7 節)
- (8) 勇気を奮い起こして、の意。
- (9) 創立の辞が持つ歴史的な意味に鑑(かんが)み、漢字や送り仮名などを編集せずに、原文のまま収録した。読みにくい箇所については、ふりがなで対応した。
- (10) (新共同訳)「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」(コリントの信徒への手紙一 1 章 25 節)
- (11) (新共同訳)「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネによる福音書 4 章 24 節)
- (12) 今野利介が、1965 年 2 月から 1972 年 2 月まで、独立学園卒業生を対象に不定期に発行していた冊子。全 22 号で、創刊当初は在京卒業生数名が発行に協力していた。
- (13) 本書には未収録。
- (14) 内村鑑三全集 4 巻 p.329 ~ p.330。
- (15) 内村の文では、<sup>よ</sup>好き人。
- (16) 内村の文では、花とにてありき。
- (17) 角谷晋次(かどやしんじ) (1937 ~) が中心となって開催されていた会。現在も会が継続中かは不明。牧師である角谷と鈴木は親交があったが、どのような経緯で親しくなったかは不明。
- (18) 英語では comparator。原文では、コンペレーター。<sup>びしょう</sup>微小な長さを高精度で測るために、正確な基準(しゃくど)と比較して物体の長さを精密測定するための装置。比較測長器、比較測定器。
- (19) John Robert Oppenheimer (1904 ~ 1967)、アメリカの理論物理学者。第二次大戦中、ロスアラモス研究所所長として原子爆弾の研究・製造・完成を指揮した。
- (20) イレーヌ ジョリオ・キュリー(Irène Joliot-Curie, 1897 ~ 1956)、フランスの物理学者。1934 年に夫とともに人工放射能を作りだし、1935 年に夫とともにノーベル化学賞を受賞した。第二次大戦後、夫と共産主義運動を活発に行ったため、米国化学会員にはなれなかった。
- (21) ジャン・フレデリック ジョリオ・キュリー(Jean Frédéric Joliot-Curie, 1900 ~ 1958)、フランスの物理学者。1925 年にマリ・キュリーの助手となり、そこで彼女の娘であるイレーヌと知り合い、1926 年に結婚。その際、姓を 2 人の旧姓を組み合わせた「ジョリオ・キュリー」とした。

- 1942年に共産党入党し、反ファシズム運動や世界の平和運動の発展に貢献した。
- (22) 原書では、大き。誤植と思われるため修正した。
- (23) 鈴木が何をもって 1918 年としたかは不明だが、おそらく、1918 年の第三回全国ソビエト会議における、ロシアが労働者・兵士・農民（ソビエト）の共和国であるという宣言の採択を基準にしていると思われる。なお、ロシア革命（二月革命、十月革命）は 1917 年、ソビエト社会主義共和国連邦の成立は 1922 年。
- (24) 現在の、岩手県久慈市山形町川井と思われる。
- (25) (新共同訳) しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。／それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、／二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。／従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」(マルコによる福音書 10 章 6～9 節)
- (26) (文語訳聖書) 「エホバ言たまふその日にはなんぢ我をふたたびバアリとよばずしてイシ(吾<sup>わが</sup>夫<sup>おっと</sup>)とよばん」(ホセア書 2 章 16 節)
- (口語訳聖書) 「主は言われる、その日には、あなたはわたしを『わが夫』と呼び、もはや『わがバアル』とは呼ばない。」(ホセア書 2 章 16 節)
- (新共同訳聖書) 「その日が来ればと／主は言われる。あなたはわたしを、「わが夫」と呼び／もはや、「わが主人(バアル)」とは呼ばない。」(ホセア書 2 章 18 節)
- (27) 日本が朝鮮を領有していた当時(1910 年から終戦まで)、朝鮮を支配するために置かれていた最高行政官庁。京城(ソウル)におかれ、朝鮮総督が長官を務めた。
- (28) 県民による選挙によらず、政府が選ぶこと。
- (29) 政府ではなく、県民が選挙によって選んだ知事。
- (30) 一般の国民の投票によって選ぶこと。
- (31) ひそかに策略をめぐらせて行動すること。
- (32) (1780～1832)、江戸後期の儒学者。幕末の尊皇攘夷運動(天皇の権威を絶対的なものとして、外国人を排斥する考え方)に大きな影響を与えた。引用されている詩は頼山陽が 13 歳の元旦に作った「立志の詩」の一句。
- (33) (新共同訳聖書) 「兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に

結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」(コリントの信徒への手紙 15 章 50 節～ 58 節)

- (34) 原書では、勇大。
- (35) 内村鑑三全集 21 巻 p.248
- (36) オミナエシ科の花の名前。
- (37) 人情に厚い風俗のこと。
- (38) 原文の表現は、現在では適切でないため改めた。
- (39) 原書では、立てる。本段落の最後の文と次の段落の最初の文でも、同様の修正を行った。
- (40) 原書では、譲り離き。誤植と思われるので、修正した。
- (41) 原書では、なった。初出の書籍(『おとこえしの花』)に合うよう修正した。